バイノーラル企画

【同居生活ＡＳＭＲ／耳かき／添い寝】

お隣の娘さんとひとつ屋根の下

脚本　日暮茶坊

2021/01/12　初稿

■登場人物

美波（みなみ）　16歳、女性。

あなた　社会人数年目の男性。声などは出さない。

○トラック1

■部屋の前

【9】しゃがみ
冬の日の夜。
美波、主人公の部屋の玄関前でしゃがみ込んでいる。
寒さを紛らわすため、手に息を吹きかけている。

美波「はーっ……はーっ……（手に息をかける）」
美波「うう……寒いよぉ。どうしてこんな日に……」
美波「ハァ……（ため息）
美波「隣のお兄さんの部屋、鍵開いてたりしないかな……」

と、主人公が見下ろしているのに気付いて、驚く。
立ち上がり、近付く

【9】→【1】立ち
美波「わっ……お、お兄さん、いつの間に!?」

美波「もしかして……ずっと見てました?」

美波「わ、は、恥ずかし過ぎる……」

美波「ええっと……実は、部屋の鍵をなくしちゃって。今日はお母さんの帰りも遅くて……っていうか、仕事で帰ってくるかもわからない日で……」

主人公（それは大変だね）

美波「それで、あ、あの……ですね。ひとつお願いが」

主人公（……?）

美波「(思い切ったように)お……お兄さんの部屋に、おじゃまさせてください！」

主人公（えええっ!?）

美波「もちろん、お礼はします！　こう見えて私、お母さんの代わりに家事のほとんどやってますから、ご飯作ったりとかお掃除したりとか得意なんです！」

美波「だから……凍えそうな哀れな女子校生を助けると思って……ね？　お願いしますっ！」

美波「あっ、お母さんのことなら心配しなくて大丈夫です。お兄さんのこと、いい人よね～っていつも言ってますからっ！」

主人公（だけど、やっぱり女の子を家に上げるのは……）

美波「お母さんが帰ってくるまでいいので……ダメ……ですか？（上目遣いのイメージ）」

美波「お仕事とかの邪魔もしませんし、ただ、お部屋の片隅に、ちょこっとだけ置いてくれればいいんです。私、小柄だからなんなら家具の隙間とかでもすっぽりいけます！　だから……！」

主人公（ハァ……しょうがないなぁ）

美波「ええっ!?　いいんですか!?　やったぁ！」

//SE:鍵を開ける

美波「あの……」

主人公（……？）

【7】急に近付いて耳元で囁くように

美波「お礼に、何でもしますから。遠慮無く言って下さいね」

【8】少し離れて、いたずらっぽく

美波「あ、お母さんに怒られちゃうようなことは、めっ！　ですよ？　ふふふっ」

//SE:扉開いて――

○トラック2

■リビング

＊「泊まらないけれど、いつも来ている」ですと、主人公＝視聴者との感覚がズレてしまうので、初めて部屋に入った（入れた）流れにしてあります。修正も可能です。

【9】

美波「おじゃましまーす……（あたりを伺いながら）」

美波「へぇ……ここがお兄さんのお部屋なんですね。へー、へー。なんだか、部屋の作りはウチと一緒なのに、男の人の部屋！って感じがします！」

美波「でも、ちゃんと片付いててすごいです。ウチのお母さんなんて、出かける前にいつもバタバタして色んなもの出しっぱなしで……（嘆息）」

//SE:ピッピッと、エアコンのリモコン音

//SE:ぶわーっと強い温風が出る

美波「あっ、エアコンありがとうございます。うわぁ……あったかい……生き返る……ハァ……エアコン発明した人は天才ですね……」

美波「……っ！（気づき）　す、すみません、ついつい勝手にくつろいじゃって……」

主人公（気にしなくていいよ）

美波「お兄さんが気にしなくても、私が気にしますっ。そうだ、もう晩ご飯食べましたか？」

主人公（まだだけど、一緒にコンビニ行く？）

美波「ええっ、コンビニ弁当ですか？　ううん……ダメじゃないですけど……。あの、冷蔵庫の中、見

せてもらってもいいですか？」

//SE:冷蔵庫ドア開ける

美波「あっ、お野菜とか色々あるじゃないですか。せっかくですから、これで何か作りますよ」

美波「任せて下さい。宿賃ってことで。お兄さんは、その間に着替えてくつろいでてくださいね」

美波「大丈夫です。台所の作りも一緒だから、どこに何があるかもなんとなくわかりますんで」

美波「あ……もしあればですけど、エプロンだけ借りてもいいですか？」

美波「（受け取って）はい。それでは、晩ご飯の支度にとりかかりますね。作ってる間、ちゃーんとお休みしててくださいね。一日働いてきて、お疲れなんですから」

美波「私も学校あったでしょうって？　それはほら、若さでなんとでもなりますから♪」

美波「はい、それじゃテレビでも見て、でゆっくりしててくださいね～」

//時間経過

【9】ふたりとも座って同じぐらいの高さ。テーブルを囲んで食事終わり。

美波「あ、あの……どう、でした？（緊張）」

美波「一応、シチュー……私、得意料理なんですけど……」

主人公（美味しかったよ）

美波「えっ！　ホントですか！　良かったぁ……（安堵）」

美波「お母さんは美味しいって言って食べてくれるんですけど、他の人に食べてもらったことってなかったから……味付けとか、好みとか、人それぞれだったりするじゃないですか。だから、ちょっとドキドキしちゃってました」

美波「良かった、好みの味付けの方向性が一緒なら、他のお料理でも大丈夫ですね」

主人公（また作ってくれるの？）

美波「え？　また、シチュー作って欲しい、ですか……は、はいっ。もちろん、いいですよ！　腕によりをかけて、今日はなかった具材とかも使って、とびっきりのシチューご馳走しちゃいますね」

主人公（でも、なんか悪いなぁ）

美波「あっ、そんな、気にしなくていいんですよ。私が好きでやってることっていうか、そもそも今日は助けてもらったお礼なんですから！　あと、やっぱりお母さん以外の人にも食べてもらえた方が、色々練習にもなりますし……」

主人公（なら、またお願いしようかな）

美波「はいっ。お腹が空いたら、遠慮無く呼んでくださいね♪」

美波「それにしても、お兄さんはいつもこのぐらいまで働いてるんですか？　私は今日、委員会の仕事とかあったから、いつもより随分遅いんですけど……」

主人公（そうだね。むしろ早いほうかな）

美波「はぁ……（感心）。うちのお母さんもですけど、働くって大変ですね……」

美波「え？　私も働いてる？　そんな、ご飯作った

りお掃除したりぐらい、家族なんだから当たり前ですって。お兄さんも……その……お隣さんだから、家族みたいなものです、うん」

美波「ちなみに……なんですけど、ちょっとだけ気になってるというか……質問が……」

美波「お兄さんって……その……ひとりぐらし、ですよね？」

美波「ええっと……なんていうか、その……変な意味じゃなくて……い、今、お付き合いしてる人とか、いるんですか？」

主人公（え？　いないけど？）

美波「あっ……そ、そうなんですねー（安心&ちょっと嬉しい）。ほ、ほら、勝手に上がり込んで、そういう人とばったりーなんてことになったら、ご迷惑おかけしちゃうかなー……なんて」

美波「いないならいいんですっ♪　えへへっ♪　え？　べ、別に喜んでないですよ！　そんな失礼なこと言いませんよー。もー」

美波「でも……良かった（小声）」

美波「あっ、そ、それじゃ食器片付けちゃいますね！　大丈夫、どこに何があったとか、大体わかりますから♪……え、手伝ってくれるんですか？　ひとりでぼーっとしてると落ち着かないんですか？　ふふっ。それじゃ、お願いしちゃいますね♪」

■キッチン

お皿を洗う美波。片付けを手伝う主人公。

//SE:シャーと水の流れる音

//SE:カチャカチャとお皿を洗う音

美波「その小皿はそっちで、牛乳パックは冷蔵庫に……って、私が教えることじゃないですよね（笑い）」

美波「でもお兄さん、普段から綺麗に片付けてるんですね。うちのお母さんにも見習わせたいですよー。え？　使ってないだけ？　もう、それなら、今度から私がもっと使ってあげます♪　こんなに色々揃ってるのに、もったいないですよー」

美波「ええっと……それじゃ、この大皿は上の棚でしたよね……よいしょっと」

//SE:上の方の棚を開く音

美波「え、高いトコ大丈夫かって？　へーきですよー。こう見えて、身体検査でも去年より2センチも身長伸びて……って、わ、わわっ」

棚の上の方に皿を入れようとして、バランスを崩す美波。

美波「きゃっ……！」

主人公、それを後ろから抱き留める。

美波「あっ……ひゃうっ……（驚き）」

【1】美波を後ろから抱きしめるような形に密着

美波「ご、ごめんなさい……！　あぶない、お皿割っちゃうとこでした……」

美波「え？　お皿じゃなくて私は大丈夫かって？　は、はい……大丈夫……です、けど……（照れ）。も、もう……手、離しても……平気ですよ？」

慌てて美波から離れる主人公。

【9】

主人公（ごめん、つい……！）

美波「ええっ？　お兄さんが謝ることなんて、なにもないですよー！　今のだって、私が悪いんだし、

助けてもらったわけですし……その……」

美波「あと、意外と……お兄さん、力強いんだなって。それでびっくりしちゃっただけです。ほら、うち、私とお母さんしかいないから……」

美波「あ、そんなことより、洗い物片付けちゃいますね♪」

■リビング
時間経過。
スマホを見ている美波。

美波「お母さん、まだ連絡ないです……既読も付かないから、やっぱり忙しいのかな……」

美波「あの……もうちょっとだけ、おじゃましててもいいですか？」

主人公（別に構わないけど……）

美波「ありがとうございます！　あの、お礼と言ってはなんですが……実は、さっき洗い物手伝ってもらってる時に、ちょっと気になってたんですよね」

【9】→【8】
美波、主人公の近くに来て座り、手を取って
美波「ちょっと、手を見せてもらっていいですか？」

主人公（……？　はい）

美波「……やっぱり、結構肌荒れしちゃってる。ちょっと待ってくださいね」

//SE:パタパタと歩く音
鞄からハンドクリームを取りだし、戻る美波。

美波「じゃーん！　ハンドクリームです！　私もよく家で洗い物して手が荒れちゃうから、いつも持ってるんです」

美波「はい、では座って手を出してください。塗るついでに、手の平のマッサージもしてあげますね」

美波「そんな、遠慮しなくていいですって。あ、もしかして、ツボ押されて痛いのとか想像してます？」

美波「ふふふっ。そんなことしませんよー。よくお母さんが疲れたときにやってあげてる、やさしーく揉むようなのですって」

主人公（そ、それなら……）

美波「はい、それじゃ右手から出してください。うわ、こうして改めて見ると……大きいですね。なんていうか……男の人って感じがします。ほら、こうしてぴったり合わせて見ると……関節一個分以上大きいじゃないですか」

美波「これはハンドクリーム、いっぱい必要ですね。いつもより多めにっと……はい、それじゃいきますね。まずは全体に馴染ませるように……」

//SE:ハンドクリーム塗る音
（マッサージと塗る音など途中挟みつつ尺調整）

美波「お兄さんの手……あったかいですね……ふふっ。それじゃ、親指から。そうです、一本ずつ、丁寧に塗って、マッサージしていきますからね」

美波「あ、くすぐったかったら言ってくださいね。はい、人差し指に塗り塗り塗り塗り……っと。もう、こんなになるまで放っておいて、社会人の身だしなみ？的に、ダメですよー」

美波「中指いきますね……すごーい、指ながーい……爪もとってもいい形してますね。比べちゃうと、私の指が子どもっぽくて恥ずかしいです……」

美波「はい、薬指いきますよー。そういえば右手の

薬指って、恋人用のリングするんでしたっけ？　あれ？　でも、特につけてた跡とかないですね……ふむふむ」

美波「では右手最後の小指ですね……こうして、小指と小指絡めてみちゃったりして……って、じょ、冗談ですよっ？　もう、そんな真面目な顔で照れないでください……こっちまで恥ずかしくなっちゃう……」

美波「はい、それじゃ右手全体のマッサージですね。ちょっとだけ力入れますよー？　もみもみもみもみ……どうです？　気持ちいいですか？」

美波「ふふっ。お兄さん、素直で嬉しいです……。可愛い♪」

美波「（気づき）あっ、すみません、調子に乗っちゃって……ええっと、左手、いきますね」

【8】→【2】

左手側に移動する美波。

美波「今度は逆に小指からいきましょうか……あ、クリームもうちょっと出さないと」

【2】→【4】

美波、主人公の背後にあるハンドクリームのチューブに手を伸ばす。

耳元と肩をかすめて衣擦れの音など接近しつつ。

【4】→【2】

元のポジションに戻って。

美波「はい、いきますよー。力を抜いて、楽にしてくださいね……ふふっ。なんだか、本当のマッサージ屋さんみたいですね。あ、私はそういうお店、行ったことないんですけど……」

美波「はい、薬指。婚約指輪とかする指ですねー。

私も将来、誰かにもらえるのかな……もらえるのかなー（わざとらしく繰り返し）……なんて、ふふっ。お兄さんを困らせたりしませんって。それより（今度一緒に出かけたい）……あ、ううん、な、なんでもないですっ」

美波「はーい、中指いきますよー。え？　勉強とか時間いいのかって？　もう、今更なんですかー。お兄さんもお母さんみたいなこと言うんだから……。（苦笑して）でも、大丈夫。私、こう見えて成績結構いいんですよ。体育とか運動は、ちょっと苦手ですけど……」

美波「それじゃ、人差し指ですね。そういえばお兄さんは普段、マッサージとか行かないんですか？　ほら、駅前とかでよくチラシとか配ってるじゃないですか」

美波「え、一時間で三千円？　それは……ちょっと高いっていうか……大人の人なら、そうでもないかもですが……ううん、だったら私がまたやってあげます♪　無駄遣いするぐらいなら、こうして私を呼んでくださいね」

美波「あとは親指さんですねー。うーん、なんだかこうしてマッサージ終わっちゃうのも名残惜しいなぁ……なんて。あ、大丈夫ですよ。バイト代とか請求しませんから♪」

美波「よいしょ……最後に両手を出してもらっていいですか？　そしたら、こうして指と指を絡めるような感じにして……根本の所からマッサージしていきますね～。あ、痛くないですか？　ふふっ、そんな緊張しなくても大丈夫ですよ～。では、いきますね。ぐりぐりっと……」

少し揉んでいる間。

美波「はいっ！　これでおしまいっ！……ど、どうでしたか？」

主人公（気持ち良かった）

美波「良かったぁ……そう言ってもらえると嬉しいです。（気づき）あ、お兄さんの手……私の手とおんなじ匂いになっちゃいましたね。ふふっ」

■トラック３

――時間経過。

【９】

美波「（気づき）あ……もう十時過ぎてる……でも、お母さんまだ連絡来ないですね……」

美波「（もじもじしつつ）あ、あの……ひとつ、お願いがあるんですけど」

美波「そこに畳んでおいてあるスェット……はい、色違いでふたつあるそれです。それ、ひとつお借りしてもいいですか？」

美波「ずっと制服のままだと、なんていうか落ち着かなくて……今更ですけど」

美波「えっ？　いいんですか？　ありがとうございます！　大丈夫、ちゃんと洗ってお返ししますから。え？　そのままで構わない？……ええっと……それ、もしかして後で……う、ううん、お兄さんならいいんですけど……」

美波「と、とにかくパジャマ代わりにお借りしますねっ♪」

美波「そうだ、お兄さん、お風呂入って来ちゃってください。その間に私、こっちで着替えてますから」

美波「あ……信用してますけど、覗いたりしたらめっ！　ですからね？」

美波「もちろん冗談ですって。ふふっ。……逆に私の方が覗いちゃったりして(小悪魔っぽく小声で)」)

――時間経過

【10】

//SE:ガチャ

主人公、扉開けてリビングに入る。

美波、リビングのソファでくつろいでいる。既にスウェットに着替えている。

美波「おかえりなさい♪　いいお湯でしたか?」

美波「あ……スウェット、私とお揃いですね。ふふっ」

美波「これ、ちょっと大きいですけど……ほら、袖とかすっぽり。でも、すごくあったかいです。もっと早く借りておけば良かったな〜」

美波「……くんくん(スウェットの匂いかいで)。なんか、お兄さんの匂いがします」

主人公(ええ?　臭い!?)

美波「あっ!　全然、嫌な臭いとかじゃないです!なんていうか……男の人の匂いなのかなって。ああ、もう……なんか変態さんみたいですね、変なこと言っちゃった……」

美波「(気づき)あ、それより、バスタオルお借りしてもいいですか?」

主人公(そこの棚にまだ使ってないのあるけど)

美波「はい、じゃあソファに座ってください」

主人公、言われるままソファに座る。

【5】

美波「少し、じっとしててくださいね。髪、拭いちゃいますから。え？　自然乾燥？　ダメです、それって髪痛んじゃいますよ？」

//SE:バスタオルで髪を拭き続ける

美波「はーい、大人しくしててね～。なんて、ちっちゃい子どもをあやしてるお母さんみたい。私も昔、お母さんにこうして拭いてもらえるの、なんか嬉しかったんですよね……」

美波「あ、そうですね……昔はお母さんも今みたいに忙しくなくて、普通の時間に帰ってきてましたね。いつからかな、今みたいな感じになったの……」

美波「中学生の途中ぐらいまでは、遅くても絶対、家には帰って来てたんですけど……担当してる雑誌がすごく売れてるみたいなんです。今、本が売れないなかでそれだから、会社全体の期待？みたいなのまで背負っちゃってるらしくて……」

美波「だから大変なのも仕方ないんですよね。本当はお仕事減らして欲しいですけど……大人って、そういうのも難しいってことは、私でもわかりますから」

主人公（美波ちゃんは聞き分けがよすぎるなぁ）

美波「え？　私が聞き分けが良すぎる？　そうですかね……。ただ、お母さんに迷惑かけたり、嫌われたくないからってだけですけど……」

美波「うーん……でも、そうですね。家事とかで結構時間取られるから、友達からの誘いとか行けないことも多いんですよね。今年は生徒会役員にもなっちゃったから、余計に忙しくて……それが悩みといえば悩み、かな……なんとなくですけど、友達とも距離を感じちゃうこともあって……」

美波「でも、それってみんな人それぞれじゃないですか。部活ある子とか、兄妹の世話がある子とか、バイトある子とか」

主人公（でも、その事情を周りに説明してる？）

美波「え？　私の事情を友達に言ってるか……ああ……言ってない……ですね。あくまで私の事情ですし……」

主人公（同じ断るでも、言った方がいいよ）

美波「そうですね。今度から断る時とかは、言ってみます。確かに理由も言わずに断られたら、もういいやってなっちゃいますよね」

美波「えへへっ。なんか、今、ちょっとだけお兄さんが大人の人だなぁって思いました。あっ、もちろん、最初から大人の人なんですけど……なんていうか……そう、しっかりしてる！　あ、でもなんかそれも失礼な言い方ですよね……すみません」

美波「え？　そのすぐ謝るのがダメ？　あっ！（気づき）そ、そうですよね。これからは、ポジティブシンキングでいきます！　せっかく、お兄さんにアドバイスもらえましたから♪」

//SE:バスタオルで拭くのここまで

美波「……さてと。あとはドライヤーで乾かしちゃいましょう。任せてください、ドライヤーさばきなら、ちょっとしたものですよ」

美波「それじゃ、ドライヤーお借りしますね」

//SE:パタパタと取りに行き、戻ってくる

//SE:ドライヤーの電源オン、温風が出る

【5】→【6】→【1】

身体の周りを回るように、距離近く。

ここからドライヤーの音続く。

（ドライヤー音で尺調整）

美波「熱くないですか？」

主人公（大丈夫）

美波「それじゃ、乾かしていきますね……ふふっ。近所の美容師さん、絶対これ言うんですよ」

【5】の時

美波「うわぁ……お兄さん、こうして見ると意外と背中大きいんですね……いつもお母さんしか見てないから、なんだか不思議な感じです」

【7】の時

美波「背中だけじゃなくて、首回りとかも結構ある……何か運動とかされてたんですか？　え、特にしてなくてもこのぐらいあるんだ……なるほど……」

美波「えっ、私は運動は全然ですよ？　走っても大体後ろの方だし……球技とかも苦手で、ボール来ても逃げちゃったりして。それがわかってるから、みんなに迷惑かけたくないし、失敗したくなくて余計に……ああ、ダメダメ。そうですよね、これもポジティブでいきます！」

美波、主人公の髪を触って

美波「このぐらいで大丈夫……かな。なんか、色々お話し出来てちょっと嬉しかったです。私、自分のことって友達とかにもあんまり話せないんですけど……なんでだろう……お兄さんといると、なんだか安心するっていうか、つい……」

美波「すみません、押しかけた状態なのに、こんなに話まで聞いてもらっちゃって」

主人公（気にしなくていいよ。むしろ、もっと聞くよ）

美波「え、いい機会だからもっと話したい？　えと……わ、私はもちろんいいですけど……時間、大丈夫ですか？　寝る時間とか、いつもどのぐらいです？　明日早いとかなら……」

主人公（まだまだ大人は寝る時間じゃないから平気）

美波「なるほど、大人の人はまだまだこれからが自由時間なんですね。確かにお母さんも、この時間に帰ってきてからひとりで晩酌とかしてます」

美波「というか、お母さん相変わらず連絡ないですね……まだ電車はあると思うんですけど」

主人公（テレビでも見てる？）

美波「テレビですか？　あ……でも、それより気になってるモノがあるんですけど」

主人公（……？）

美波「その……そこのテーブルの上にあるの、使ってみてもいいですか？　私、それ一度やってみたくて……」

○トラック４

【９】→【７】

ソファに横になる主人公。

美波、その頭を膝枕する。

美波「それじゃ、ここに横になってください」

美波「違います、頭はこっち。私の膝の上で」

主人公（ええ？　でも、それは……）

美波「恥ずかしがらなくていいですよ。というか、お兄さんが恥ずかしがると、私まで恥ずかしくなっちゃいます……」

美波「それに、膝の上じゃないと高さ的に耳の穴よく見えないです」

主人公（じゃ、じゃあ……お願いします）

美波「はい、それじゃ、こうして横……よりも縦の方が楽ですよね」

美波「前にお母さんに教えてもらったんです」

美波「もし好きな人が出来たら、こうして膝枕してあげるのよって……」

美波「……（気づき）あっ、ええっと、そういう意味じゃなくて！　膝枕の仕方的な話で！」

美波「うう……は、恥ずかしい……」

美波「そ、それじゃ、耳かき始めますね」

【7】近く

主人公（は、はい……）

美波「ここまでしておいてなんですけど、実は私……人の耳かきするのって、はじめてなんですよね」

主人公（ええっ!?）

美波「大丈夫、やさしくしますから……ね？」

美波「それじゃ……いきますよ……もし痛かったりしたら、右手を上げてください……って、それは歯医者さんですね（苦笑）」

美波「まずはなかをよく確認して……はぁ……へぇ……なるほど……大人の人の耳のなかって、こんな感じなんですね……」

美波「大丈夫、任せてください。こう見えて、手先は器用な方なので。とりあえず、入り口の方からいきますね……」

美波「で、では……（緊張）ゴクリ」

//SE:ここから耳かき音継続

（セリフSEで尺調整）

エロくなりすぎならその部分カット（役者さん合わせで）

美波「い、痛くないです？」

美波「あ……少し取れました……なるほど……」

美波「……ふぅ」

美波「……うん」

//さらに近付く、衣擦れの音

美波「あ……もうちょっと……」

美波「あ、ティッシュもらいますね」

//SE：ティッシュ抜く音

美波「それじゃ、もう少し先の方に……」

美波「じっとしててくださいね……」

美波「ん……（上手くいかない）」

美波「あ……（取れて喜び）」

美波「わ、よく見たら最後に大ボスみたいなのがいます」

美波「これは……いけるかな……」

しばらくカリカリと

美波「ふぅ……手強い……」

美波「でも……あとちょっと……」

美波「うん、うん……」

美波「あ……いけそう……」

美波「もうちょっと……」

夢中になって密着

美波「あと少し……ああ……」

美波「惜しい……あ……」

美波「ん……（集中）」

美波「やった♪」

美波「やりました！　ふぅ……（緊張ほぐれ）」

美波「あと、こっち側はもうちょっとだけ……」

美波「なんだか、ちょっと慣れてきた感じがします。最初はちょっと緊張しましたけど……」

主人公（そういえば、初めて会ったときも緊張してたよね）

美波「え……お兄さんと初めて会ったときもすごい緊張してた？　そ、そういえばそうだったかも……」

美波「確か、お兄さんが引っ越してきて、ご挨拶に来てくれたんですよね。でも、うちのお母さんあの時もいなくて、家に私しかいなくして……」

美波「だ、だって、やっぱり緊張しますよ。知らない男の人が急に来たら」

美波「でも……最初だけでしたよ。ほら、覚えてます？　駐輪場で自転車のチェーンはずれちゃって、困ってたの直してくれて」

美波「こういうの得意だからって手伝ってくれて……でも、チェーンの油の汚れ、顔につけちゃってて」

美波「あの時は、つい笑っちゃってすみませんでした……」

美波「でも、あのあたりから知らない男の人じゃなくて、お隣のお兄さんって感じになってきて……」

美波「えへへっ。なんか、こうして改めて話すと恥ずかしいですね……」

美波「はい、それじゃ右の耳完了です♪」

美波「と、その前に、最後のしあげが残ってました」

美波、主人公の右耳に息を吹きかけてくる。

美波「ふーーーっ」

主人公（……っ!?）

美波「どうでした？　気持ち良かったですか？」

主人公（それはまぁ……）

美波「良かったぁ……それじゃ、反対側いきましょうか。こっち向きで、ごろーんてしてください。はい、良く出来ました～」

【7】→【3】

美波、主人公の左耳の耳かきをしていく。

美波「よーし、それじゃ左側のお耳、はじめますね」

881 美波「最初より大分慣れてきた感じするので大丈夫
882 だと思いますけど……もし、何かあったら言って下
883 さい」
884
885 美波「まずは入り口から……そろそろっと……」
886
887 美波「右ほどはたまってない感じですね……左右で
888 違いあるんだ……なるほど……」
889
890 美波「……よしよし」
891
892 美波「……うんうん」
893
894 美波「もうちょっと頭ずらして……うん、そう、あ
895 りがとうございます」
896
897 美波「……どうですか？　この辺」
898
899 美波「気持ちいい……ですか？」
900
901 美波「こりこりってしてますね……ふふっ」
902
903 突然近付いて、
904
905 美波「ふーーーーっ」
906
907 主人公（ひゃっ）
908
909 美波「（悪戯っぽく）どうしちゃったんですか、変な
910 声出して」
911
912 美波「細かいのを吹き飛ばしただけですよ？　こん
913 な風に」
914
915 美波「ふーーーーーっ」
916
917 主人公（おおっ）
918
919 美波「ふふっ、可愛い……」
920

921 美波「お兄さん、耳に息かけられるのに弱いんですね」
922
923
924 美波「でも、嫌って感じ……じゃないですよね？」
925
926 美波「むしろ、喜んでるみたいな……」
927
928 美波「ふーーーーっ」
929
930 美波「ふふふっ（小悪魔的な笑み）」
931
932 美波「お兄さん可愛いから、なんだか悪戯したくなっちゃって……」
933
934
935 美波「はい、ここからは真面目にやります」
936
937 美波「……あれ、ちょっとよく見えない……」
938
939 //SE:衣擦れの音、密着
940
941 美波「ん……これなら……」
942
943 美波「あっ……いけそう……」
944
945 美波「あ……あっ……」
946
947 美波「やった♪（取れた！）」
948
949 美波「どうです？　気持ちいいですか……？」
950
951 美波「ふーーーーっ」
952
953 主人公（ひゃっ！）
954
955 美波「あ、つい……」
956
957 主人公（もう、イジワルしないでよ）
958
959 美波「はーい、もう悪戯しません。これが最後です」
960

美波「ふーーーーっ」

耳元で囁くように

美波「初めてでしたけど……すごく、良かったです」

美波「お兄さんも、気持ち良くなれましたか？」

主人公（うん……）

美波「ふふっ。そんなに喜んでもらえるなら、今度、お母さんにもやってあげよっと♪」

○トラック５

【15】

ソファに並んで座った主人公と美波。

美波「ふぅ……（満足）。なんていうか、お兄さんの反応がうれしくて……ちょっと調子にのっちゃいました、ゴメンナサイ」

美波「さてと……そろそろお母さんも連絡が……（嘆息）ないですね」

美波「もう十二時過ぎるのに……終電なのか、タクシーか……」

美波「ん……（ちょっと眠い）せめて、連絡ぐらいくれればいいのに……」

美波「ふぁ……（小さな欠伸）」

美波「あ、だ、大丈夫です、まだ全然眠くは」

美波「いつもこの時間、宿題とか勉強してるので……今日はお休みですけど」

主人公（でも、疲れてるみたいだし）

美波「大丈夫……大丈夫……です。委員会とかで、

ちょっと疲れただけで……」

美波「お兄さんのお部屋で、最初はちょっと緊張してましたけど……もう、安心っていうか……あれ、私、何言ってるんだろ……ふぁ……（小さな欠伸）」

美波「でも、ここで寝ちゃうわけには……まだ、もっとお話ししたい……」

美波「せっかくなんだから……んん……」

美波「ふあぁぁぁ……あ、ご、ごめんなさい……あの、ほんのちょっとだけ、ほんのちょっとだけ目を閉じてもいいですか？　5分経ったら起こして欲しいので……」

美波「5分で大丈夫……です……」

美波「なんか急に……眠くて……」

美波「ん……お兄さんも、一緒に寝ますか……？」

美波「ふふふっ。冗談、です……」

美波「そんなめいわく……かけられない……」

//SE:とさっと主人公の方にもたれる美波。

美波「すぅ……（寝息）

ここから1分ほど寝息。

美波「……すぅ……すぅ……」

美波「ん……ん……」

美波「お兄さん……ふふっ……ふふふっ……（寝てる）」

美波「すぅ……」

寝息が深くなっていくのがわかる。
主人公、仕方なく美波を抱きかかえ、ベッドに運ぼうとする。

美波「んん……（寝ぼけ）あれ……お姫様……だっこ……」

美波「お兄さんの手……あったかい……すぅ……（眠り）」

運ばれていく美波。

美波「ん……なんか揺れてる……」

美波「眠くない……寝てない……です……」

//SE:ベッドに横たえる

美波「あ……お布団……気持ちいい……」

主人公、ソファに戻ろうとするが美波に服を掴まれる。

美波「……あ、ダメ、お兄さん……そっち行っちゃ……お兄さんの場所……ここですよ～」

美波、ぱんぱんと自分の横の布団を叩く
//SE:パンパン

美波「ほら、はやくー（寝ぼけ）」

美波「疲れてるんですからー、一緒にお休みしましょー（寝ぼけ）」

美波「私が……あっためてあげますよ？」

美波「……でも……いや……ですかー？」

主人公(嫌じゃないけど、これはマズイのでは……)

美波「嫌じゃないなら、マズくないですー。私がいいって言ってるんだから、いいんですー」

美波「ね……お願い……」

主人公（ちょっとだけ、ちょっとだけね）

美波「ちょっとだけじゃダメー。ゆっくりしてくれなきゃやですー」

美波「はい、こっちでごろーん」

//SE:またパンパンと布団たたく

【9】→【7】

ベッドの奥側（窓側）に美波。

手前側に主人公が横になる。

美波「良く出来ました〜。ふぁぁぁぁぁ……（欠伸）」

美波「ほら……お布団ひんやりしてても、こうしてくっつくと、あったかい……」

美波「ぎゅうってしてください……」

美波「ダメ……もっと強く……」

美波「うん……なんだか、すごく気持ち良くて……安心……」

美波「お母さんとも違う……不思議な感じ……」

美波「んん……（くんくん）いい匂い……」

美波「はぁ……（うっとり）なんだか、すごく……いいなぁ……」

美波「こういうの、幸せっていうのかな……」

美波「んん……すぅ……ねむ……」

美波「すぅ……すぅ……」

美波「すぅ……」

1分ほど、完全に寝ている美波。
急に、ハッと気付いたように

美波「……（気づき）っ!?」

寝ぼけていた美波、状況に気付き飛び起きる。

美波「えっ!? あれっ!? ええっと、私、なんで……あれ!? 今の夢じゃない!?」

美波「す、すみません……！ 私、とんでもないことを……！ え？ 気にしてないし、むしろゴメン？ ち、違います！ 謝るのは私です！ なんか、めちゃくちゃ寝ぼけてて……てっきり、夢だとばかり……ふぇぇぇぇ（錯乱）」

美波「あ……あの……はしたない子だと思わないでもらえると……嬉しい……です」

美波「あ、ありがとうございます……」

主人公（じゃあ、僕はソファで寝るよ）

美波「え……お兄さん、ソファで寝るんですか？」

美波「……（考えて、思い切って）」

美波「あ、あのっ！ それなら……その……良かったらなんですけど……一緒に……寝ませんか？」

美波「あの、そんなくっつくとかじゃなくていいので……私、はじっこの方で、ちっちゃくなってますから」

美波「ほ、ほら、その……お布団、温めておきました……的な？」

美波「ちょっと無理があります……よね？　大丈夫です、わかってます……自分が変なこと言ってるって」

美波「あ……もう、そんなに笑わなくてもいいじゃないですか……」

美波「いいです、私がソファで寝ますから、お兄さんはお布団で」

美波「……（気づき）あ。お母さんからメッセージ来てました！」

美波「ええと……あ……」

美波「（もじもじ）ええっと、その……」

美波『お兄さんによろしくね♪』とだけ……」

主人公（どういうこと!?）

美波「そういうこと……みたいです……もうっ、お母さんったら……」

美波「だから……安心して、おやすみしましょ？」

美波「お布団掛けて……はい……」

美波「ふふっ……なんだか、ちょっと緊張しちゃいますね」

美波「もうちょっとだけ……お話し……いいですか？　また眠くなるまで……」

美波「今日は本当にありがとうございました……お兄さんがいなかったら、カラオケボックスとかで朝まで過ごさなくちゃいけないところでした……」

美波「ひとりじゃ危ない？　そうですね……はい、気をつけます（反省）」

美波「それじゃ……今度行くときは、一緒に行きませんか？　カラオケ」

美波「ホントですか？　うわぁ……嬉しい……。約束、ですよ？」

美波「はい、小指出して下さい」

美波「ゆびきりげんまん、嘘付いたらはりせんぼんのーます」

美波「ふふっ……なんだかんだ言って、こうして素直につきあってくれるの、すごく嬉しいです」

美波「私のこと、子ども扱いしないでいてくれるし……」

美波「だから……」

美波「そ、その……（好きと言い出せない）」

美波「ええと……な、なんでもないです（照れ）」

美波「明日は早いんですか？」

美波「あ、私より早い……じゃあ、目覚ましかけないとですね」

美波「少し早めにしておいてください。私、朝ご飯作りますから」

美波「朝はちゃんと食べないとダメですよ～」

美波「泊めてもらったお礼です♪　気にしないでください」

美波「むしろ、私が作りたいんです♪」

美波「ふぁ（欠伸）……あれ……もっと、お話ししたいのに……」

美波「そうなんです……もっと……もっと……お兄さんのこと……知りたい……」

美波「んん……あの……ひとつだけ、お願い……」

美波「こうして……手、握っててもいいですか？」

美波「そしたら……すごく……しあわせな……」

美波「すぅ……」

美波「お兄さん……好き……」

○トラック６
10分ほど寝言、寝息でF/O
寝言基本的にアドリブで。

以下寝言案（ポジティブ、心地よい感じのセリフで）

美波「……んん……」

美波「ふあぁ……」

美波「すぅ……すぅ……」

美波「んん……美味しい……」

美波「そこ……あ……そこです……」

美波「ふふ……ふふふっ」

美波「くぅ……」

美波「あったかい……」

1281 美波「ぎゅうって……ぎゅうってして……」
1282
1283 美波「今度は……私の耳かき、お願いします……」
1284
1285 美波「おふろ……いっしょに？　ううん……」
1286
1287 美波「おふろなら、ぬがないと……」
1288
1289 美波「もうおなかいっぱい……」
1290
1291 美波「気持ちいい……です……」
1292
1293 美波「手、はなさないで……」
1294
1295 美波「ふーーーーっ（耳元）。ふふふふっ（悪戯っぽく）」
1296
1297
1298 美波「お兄さん……朝ですよ……くぅ……（寝てる）」
1299
1300 美波「お兄さんと一緒におでかけ……楽しみ……」
1301
1302 美波「お母さんには渡さないんだから……もー……」
1303
1304 美波「いい匂い……お兄さんの匂い……」
1305
1306 美波「ふふ～（寝言で鼻歌）」
1307
1308 美波「もっとくっついて……ね……」
1309
1310 主人公の頭を抱きかかえるようにして、
1311
1312 美波「はーい、おやすみですよ～……」
1313
1314 美波「ゆっくり寝ましょうね～」
1315
1316 美波「ずっと……こうしてたいなぁ……」
1317
1318 美波「朝なんて来なくていいのに……」
1319
1320 美波「お兄さん……可愛い……」

1321
1322　美波「だいすき……です……」
1323
1324　//END